



大学生の将来展望と学業に対するリアリティショック：縦断的面接調査による質的検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2014-02-03 キーワード: 作成者: 半澤, 礼之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008465

大学生の将来展望と学業に対するリアリティショック： 縦断的面接調査による質的検討

半澤 礼之

北海道教育大学教育学部釧路校地域学校教育専攻教育心理分野

Future Perspective and Reality Shock for Studies on Undergraduates : Qualitative Analysis of Longitudinal Interview.

Reino HANZAWA

Department of Educational Psychology, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要旨：本研究は、「入学前に抱いていた大学における学業イメージや期待と、大学入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じた否定的な違和感（半澤，2007）」として定義される学業に対するリアリティショックを一年生の時に感じた大学生が、二年生にあがった際にそのリアリティショックをどのように経験しているのかについて検討することを目的としたものであった。一年生の時にリアリティショックを経験していた大学生を追跡し、二年生時に面接調査を行った結果、多くの学生は、カリキュラム上専門科目の授業が増えたり、学業上の問題を感じたときに問題焦点型の対処が可能になったことによって、学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していることが明らかになった。また、彼らはそのような学業に対するリアリティショックの変化と、自分の将来の学業生活の展望を関連づけてとらえていることも示された。

問題と目的

本研究は、高校から大学への移行期における学業に対する初期不適応として捉えられる「学業に対するリアリティショック（半澤，2007，2009a）」を経験した大学生に対する追跡調査を通じて、彼らが大学一年生の時に有していた学業に対する意識が、学年が上がった後の学業に対するリアリティショックの変化とどのような関連を持つのかについて探索的に検討するものである。

学業に対するリアリティショックとは、「入学前に抱いていた大学における学業イメージや期待と、大学入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じた否定的な違和感（半澤，2007）」として定義されるものである。これは端的に述べれば、入学後に学生が大学での学業に対して感じる「こんなはずではなかったのに」という違和感を指す。

大学生を対象として高校から大学への移行期に焦点を当てた多くの研究が指摘しているように、彼らはこの移行期において様々な危機を経験する。先述の定義からわかるように、学業に対するリアリティショックは、移行期において大学生が経験する学業上の危機であると考えられることができるだろう。半澤（2007）では学業に対するリアリティショックを測定する尺度が開発され、それが学業意欲低下や授業意欲低下（下山，1993）、学業的自己疎外感（山口，2003，2005）と関連を持つことが明らかになっており、大

学生の学業初期適応にとって重要な概念であると考えられることができる。大学生を対象とした大規模な調査により、彼らの大学生活における学業重視傾向の高さが様々に指摘され（株式会社ベネッセコーポレーション，2005；京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会，2008），また、社会からは大学・大学生に対して大学教育を通じた様々な力の獲得が要求されている（本田，2005；文部科学省，2008；松下，2010）現代において、大学生の学業適応の問題は重要な検討課題であると言えるだろう。学業に対するリアリティショックが先述のように大学生の学業適応に影響を与える概念であるとするならば、彼らがそのリアリティショックをどのようにして経験していくのかについて検討することが必要になると考えられる。

この点について、半澤（2009a）では、大学生の学業に対するリアリティショックとその対処について、また半澤（2009b）では、大学生が学業に対するリアリティショックを経験する背景となる要因について、大学一年生を対象とした縦断的な面接調査によって探索的に検討が行われている。

半澤（2009a）では、学業志向的な進学動機をもった心理学専攻の大学一年生に対して入学直後の4月、6～7月、9～10月と三回にわたり縦断的な面接調査が行われた。その結果、調査対象者は上記した学業に対するリアリティショックを経験しており、時間が経つにつれてリアリ

ティショックに関する発話が増加するという結果が得られている。この研究では、得られた発話に対してグラウンデッドセオリーアプローチ (Glaser&Strauss, 1967; Strauss & Corbin, 1990) による分析が行われており、学業に対するリアリティショックやその対処の構造として、Table 1

のようなカテゴリーが存在することが示唆される結果が得られた。また学業に対するリアリティショックに関する具体的なエピソードについては、以下のような例が示されている。

Table1. 学業に対するリアリティショックとその対処(半澤, 2009a)

	カテゴリー	概念
学業に対するリアリティショック	過去展望	過去の心理学経験
		過去に持っていた心理学への期待や意欲
	心理学への志向性	専門的な学びへの欲求
		大学の学業における心理学の位置づけ 学業志向的な大学進学動機
現在の大学での学びに対する認識	期待していた学業内容との相違	
	学問としての心理学への違和感	
	カリキュラムへの不満	
対処行動	専門科目以外の活動の重視	学業以外の活動への取り組み
		資格取得に向けた取り組み
		語学や一般教養に対する取り組み
	将来展望	将来の学業生活の展望 将来の学びの土台

調査対象者：

大学はやっぱり、ずっと心理やりたかったし。うん。そう受験のときも心理でここを選んだわけだし。だから勉強は大事だと思う。

調査者：

では実際に大学での勉強を経験してみて、どうだった？

調査対象者：

そうですね、なんか、今こう、大学に入って、なんかもっと心理的なことを教えてもらえるとと思ったら、まだ2個しかないじゃないですか。〇〇(講義名)と××(講義名)。でも××は心理なのかって言われたら、うーん、って感じだから。なんか、〇〇の方でしか、心理らしいって私が感じられるのはないから

(第3回面接時点でのエピソード。括弧内は筆者補足)

半澤 (2009a) において学業に対するリアリティショックを経験した調査対象者の学生は、具体的には、心理学の専門科目が少なかったり、また、自分の思い描いていた心理学の内容と実際に大学で学ぶことのできる内容が異なっていたりしたことが、学業に対するリアリティショックを経験する背景となっていた。そして、その問題に対処するために、いったん専門科目 (心理学) の学びから離れたたり、

また、「大学一年生である今は自分が思い描いていた心理学を学ぶことは出来ないが、この先学年があがれば学ぶことができるだろう」という将来展望を同じ専攻の先輩やシラバスといった情報をもとに形成し、その将来展望を希望として持つことで心理学への期待を維持したりしていることが示された。その一方、問題に積極的に働きかけることで学業に対するリアリティショックを解消しようとするような問題焦点型の対処方略は、一部において見られたものの (伊田, 2011)、十分に確認することは出来なかった。このように、大学生が学業に対するリアリティショックを経験したこと、そして彼らが問題焦点型の対処を十分にとることができなかったことについて、半澤 (2009b) では次のような検討が行われている。

半澤 (2009b) では、半澤 (2009a) のデータを再分析し、大学生が学業に対するリアリティショックを経験した背景にある要因や、彼らが問題焦点型対処を十分にとることができなかった原因について明らかにすることを目的として研究が行われた。その結果、学業に対するリアリティショックを経験する学生側の要因と、彼らが問題焦点型対処を十分にとることができなかった原因について、大学生の「生徒的-非生徒的学業態度モデル (Table 2)」によって説明ができるとされている。

Table2.「学業に対するリアリティショックとその対処」の背景にある「大学生の生徒的-非生徒的態度」モデル(半澤, 2009b)

生徒的-非生徒的	カテゴリーグループ	カテゴリー	概念
↑ 生徒的 ↓	生徒的学業態度	大学選択時の検討不足	大学名を重視した大学選択 学びの内容に対する受動的な期待
		受動的な学業態度	大学での学びとは授業 教えてくれないと学べない
	学業と職業の直接的な接続に対する意識	職業と結びついた講義への志向性	専門科目に対する受講意欲の高さ 職業に役立つ講義の希求
		学業を通じた職業展望	大学で学んだことを生かした就職 目標である職業のための学業
↑ 非生徒的 ↓	大学における学びの認識	大学における学びの認識	大学での学びの多様性の認識 学習方法の未習得への言及

このモデルは、大学生の生徒化という観点から彼らの学業態度を捉えたものである。大学生の生徒化とは、「そもそも学生であり、生徒ではないとされている大学生について、彼らが生徒と化す現象(伊藤, 1999)」であり、このような生徒化した大学生の特徴として武内・佐野・伊藤・谷田川(2004)は、大人に従順で自主性が乏しく、与えられた目標を素直に受容する性向を持っていることを指摘している。そして、そのような学生の学びに対する態度として、半澤(2009b)は、大学以前の学校段階と大学を連続したものとして捉え、そこに質的差異を見出さない/見出せないという特徴があるとした。また伊藤(1999)は、大学生の生徒化を「他律性」、「依存性」といった言葉を用いて説明しており、学ぶべきことは学校が用意し教えてくれる(=自分で見つけ、身につけるのではない)と認識し、大学が与える教育サービスに対して受動的に充足し、他のものを積極的・具体的に求めないという特徴を指摘している。

半澤(2009b)では、学業に対するリアリティショックが表れたり、問題焦点型対処が十分にとられなかった学生側の要因として生徒化した彼らの学業態度をあげ、【生徒的学業態度】というカテゴリー名をつけている。そして、この生徒的学業態度の具体的なエピソードとして以下のような例が示された。

調査対象者

うん、だからもう、すぐ心理のことを勉強させてもらえるんだと思って、例とかあげて、例、なんだろう。実習みたいなそういうのをさせてもらえるかなって思ってたからわくわくしてたけど、実際は違って。心理をやりたいと思って大学に来たわりには、何もさせてもらってないし、学んでないなって思った。

(第3回面接時点でのエピソード。下線は筆者補足)

下線で示した「させてもらう」という語り口からは、学生の学業に対する他律性・依存性が伺えるだろう。このような生徒化した学生に特有な学業態度が、学業に対するリアリティショックを経験したり、それに対して十分に問題焦点型の対処を取ることができなかつたりする原因であると半澤(2009b)では述べられている。つまり、「大学一年生の時点では自分の学びたいことを学ばせてもらえない」「学ばせてもらえないのだから、自分から働きかけてそれを解決することはできない」という考えを、この研究で調査対象者になった学生は一定程度有していることが推察されるのである。

このような生徒的学業態度が存在する一方で、半澤(印刷中)では、このような生徒的学業態度を脱し、生徒から学生に移行する上で重要なものとして、半澤(2009b)で示された【大学における学びの認識】というカテゴリーをあげている。これは、大学での学業に対する視野の拡大や、それまでの学校段階における学習方法では大学で学んでいくことが難しいということの気づき(半澤, 2009b)を表す

カテゴリーである。半澤(2009b)では、調査時期となった大学一年生の10月ではこの気づきが問題焦点型対処に結び付くにはまだ十分ではない可能性が指摘されているが、このような気づきを持つことで、その後問題焦点型の対処を取ることができるようになる可能性があると考えられるのではないだろうか。

これまで半澤(2009a, b)を概観してきたが、これらの研究で調査対象とされていたのは、大学一年生であった。

【生徒的学業態度】が学業に対するリアリティショックの背景であるとするならば、彼らとその態度を有し続けていたとしても、学年があがることで専門科目を「教えてもらえる」経験が増すため、学業に対するリアリティショックが軽減もしくは解消される可能性がある。これは、半澤(2009a)において学業に対するリアリティショックの対処方略とされた【将来展望】というカテゴリーからも同様の指摘を行うことができるだろう。また、学年があがることによって【大学における学びの認識】が広がったり深まったりすれば、問題焦点型の対処が可能になるかもしれない。そしてそれによって、同様に学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消される可能性がある。

以上の議論より本研究では、半澤(2009a, b)で対象となった大学生に対して、大学2年時に追跡調査を行い、学年があがることによって学業に対するリアリティショックが変化しているかどうか、また、その変化と関連を持つ要因は何なのかについて探索的に検討を行うことを目的とする。

方法

調査対象者

半澤(2009a, b)の調査対象者のうち、追跡調査への協力を承諾した心理学専攻の大学2年生10名(男性3名、女性7名)。平均年齢は19.7歳(SD=0.69)であった。

調査時期

2003年9月～10月

調査手続き

「あなたの大学2年生前期の生活を教えてください」という大学生活を広く問う質問から始め、自身の生活について自由に語ってもらった。その中で学業に関する語りが現れた際に、「昨年の面接では、今は専門科目の講義が少ないが学年があがると増えるので、専門的な勉強ができるようになっていましたね。実際に学年があがってみたら、どうですか?」と、過去に経験した学業に対するリアリティショックを現在どのように捉えているのかについて問う質問を行った。また、対象者から学業に対するリアリティショックに関する語りが自発的に現れるケースもあった。

面接時間の平均は約1時間であった。また、面接によって得られた発話は研究のみに使用し、個人が特定されるような引用の仕方は行わないことを調査対象者に説明し、了承を得た上で発話内容の録音がおこなわれた。

データの分析

録音によって得られた発話を文字に起こし、発話データとして分析をおこなった。文字起こしされた発話データは単一の意味のまとまりごとに分節化され、分析の対象とされた。分析は、本研究の目的に従う形で以下の3つの観点に基づいて行われた。①学年があがり、「自分が思い描いていた専門的な勉強ができるようになった」と感じているかどうか（専門的な学びの増加）、②大学一年生の時に感じていた学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消されているかどうか（学業に対するリアリティショックの変化）③学業に対するリアリティショックの軽減や解消の有無と関連を持つと考えられる要因は何か（学業に対するリアリティショックの変化と関連する要因）。以上3点の観点に基づいて調査者が分節化された発話を分類し、その分類に適切だと考えられる名前をつけてカテゴリー化した。そのカテゴリーを、調査者と心理学専攻の大学院生一名で確認したところ、二名の分類に対する評定の一致率は91.4%であった。二名の評定が一致しなかった箇所については、評定者間の話し合いによって最終的に一つの種類へと整理を行った。

結果

専門的な学びの増加

初めに、調査対象者が大学一年生時点において語ってい

た、学年があがると「専門的な勉強ができるようになる」という将来展望が彼らにとって現実となったのかどうかについて検討を行った。先述した、「昨年の面接では、今は専門科目の講義が少ないが学年があがると増えるので、専門的な勉強ができるようになっていましてね。実際に学年があがって見た今、どうですか?」という質問に対する回答、また、彼らからの自発的な発話を大学一年生時点での将来展望が現実のものに「なった／ならない」という観点で整理を行った結果、全ての調査対象者（N=10）から大学1年生の時に描いていた将来展望が現実となったという発話を得られた。

学業に対するリアリティショックの変化

得られた発話データについて、大学1年生の時に感じていた「学業に対するリアリティショック」が軽減、もしくは解消しているかどうかという観点から分析が行われた。その結果、(A)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消した(N=8)、(B)学業に対するリアリティショックは軽減、もしくは解消していない(N=2)、の2つのカテゴリーに調査対象者の発話が分類された。また、(B)に関しては、(B-1)学業に対するリアリティショックが軽減・解消せずに問題が先送りされたものと、(B-2)学業に関して新たな問題が発生したものに更に分類された(Table 3)。

Table3.学業に対するリアリティショックに関する発話の分類

(A)	学業に対するリアリティショックの軽減、もしくは解消(N=8)	うーん、勉強自体のモチベーションが、その、心理がやれるってことで、実際授業でやれるってことで高くはなりますよね。去年は2コマしかなかったわけですし。で、自分のためになるかなっていう点で、あの、無駄じゃないっていう気はしますね。やってて。これはいつか使えるかなって感じで。
(B)	B-1:学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していない/問題の先送り(N=1)	実験とかも、結局やったけど、何に使えるか微妙って感じ、結構、今やってる心理って必修科目とかもそうなんですけど、人生で何に役立つかわかんないのが多いんですよ。だからそれよりは、(3年生になって)ゼミで、こう、いじめとかそういう問題をやって、普通の日常生活に関わりそうな心理をやるゼミがいいんで。それなら、将来子どもを持った時とか、そういうのにも役立つだろうし。うん。だからそういうの。
	B-2:学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していない/新たな問題の発生(N=1)	これから心理を、なんか自分のやりたい方向に行くのに、うん、これは何だろうって感じがして。とりあえずなんか、授業が増えてやることが増えて、なんか、実験、課題が出て、それを出たからやってるって感じがすごいして。なんかだんだんよく分からなくなってきた。心理ってなんだろうって。だんだん分からなくなってきた。

学業に対するリアリティショックの変化と関連する要因

学業に対するリアリティショックの変化と関連を持つ要因という観点から語りの分類をおこなったところ、関連する要因として「講義の専門化の認識と講義数の増加」、「問題焦点型対処の発生」という、変化を引き起こす原因とな

ると考えられる2つのカテゴリーと、「将来展望」という変化の結果として捉えることのできる1つのカテゴリーが得られた。「将来展望」については、〈人生〉〈職業〉〈在学中〉の3つの下位カテゴリーが得られた。カテゴリーと発話の例についてTable 4に示す。

大学生の将来展望と学業に対するリアリティショック

Table4. 学業に対するリアリティショックの変化と関わる要因

分類されたカテゴリー		発話の例
講義の専門化の認識と講義数の増加	(A)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消	専門もやっとなんて心理がきたぞっ！って感じで、水曜日が楽しいですね。実験の日で、あと3限が××で、4限が××で、心理の(講義が多い)日なんですよ(笑) ハードなんですけど、充実感がありますね。
	(B)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していない	実験とかも、結局やったけど、何に使えるか微妙って感じ、結構、今やってる心理って必修科目とかもそうなんですけど、人生で何に役立つかわかんないのが多いんですよ。だからそれよりは、(3年生になって)ゼミで、こう、いじめとかそういう問題をやって、普通の日常生活に関わりそうな心理をやるゼミがいいんで。それなら、将来子どもを持った時とか、そういうのにも役立つだろうし、うん。だからそういうの。
問題焦点型対処の発生	(A)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消	なんか授業で聞いててちょっと違うなあとか思ったとき、1年のときは文句いうだけだったんですけど(笑) でも色々勉強してくうちに、たとえば図書館で調べればいいじゃないとか、先生に聞きにいこうとか。なんでちょっと違うなあって感じたんだらうって、自分で勉強するようになったんですよ。これ進歩ですよ(笑)
	(B)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していない	授業が増えて思ったんですよ。心理っていっぱいあるなって。いろんな種類があるから、仕事とか関係なくても、なんていうか、人生？(笑) 自分の生活の中で生かせることってたくさんありそうって思ってる。
人生	(A)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消	実験とかも、結局やったけど、何に使えるか微妙って感じ、結構、今やってる心理って必修科目とかもそうなんですけど、人生で何に役立つかわかんないのが多いんですよ。
	(B)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していない	心理学はやりたいことだし、そのために大学に入ったので、そうですね、それを将来の仕事に、はい、生かしていきたいって考えてる以上は、やっぱ、授業が増えたのはまず良いことなんで、次はそれに満足しない、自分でもどんどんやっていくべきかなって思ってる。やっとなんか色々取り組めるようになってきたんで。
将来展望	(A)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消	なんか、心理を、心理系の仕事をやるにはそれなりの勉強が必要で、それがないとちゃんと仕事できないんじゃないかって、それで一応入ったんですけど。入ってみると、なんだろう、大学は思っただけでは就職しない、そういう仕事には、今やってる勉強が、なんだろう、ちゃんとなんか、つながっていくのかわからない。確かに授業は増えたんですけど、でも、やってもつながってる感じがなくて。将来のことかと、それは自分でつなげるものなのかもしれないんですけど、なんかでも、そういうのが分からなくなってる。
	(B)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していない	そうですね、あと、専門(科目)が増えて、いろんな先生の(講義)が受けられるのって、ゼミ、来年ゼミじゃないですか。選ぶのに、まあ、××先生のところに行きたいなあっていうのはなんとなくあるんですけど、それでも、ゼミ選びには結構いいかなって。
在学中	(A)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消	だからそれよりは、(3年生になって)ゼミで、こう、いじめとかそういう問題をやって、普通の日常生活に関わりそうな心理をやるゼミがいいんで。それなら、将来子どもを持った時とか、そういうのにも役立つだろうし、うん。だからそういうの。
	(B)学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していない	

「講義の専門化の認識と講義数の増加」については、(A)の調査対象者の全てが(N=8)受講できる講義の専門化や講義数の増加に言及していた。また、(B)の調査対象者においても、1名(B-1)がこのカテゴリーに該当する発話を行っていた。

「問題焦点型の対処の発生」については、(A)の調査対象者のうち5名から、学年があがることによって、学業に対する問題を体験した際に問題焦点型の対処をとることができるようになったという発話を得られた。(B)の調査対象者からはこのカテゴリーに該当する発話は得られなかった。

「将来展望」については、他の2つのカテゴリーとは異なり、更に<人生><職業><在学中>の3つの下位カテゴリーが得られた。本研究で対象とした全ての調査対象者から、学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消しているかどうかに関わらず、学業に対するリアリティショックの変化と現在より先の時点の出来事の展望を関連づける発話を得られた。

<人生>については、学業に対するリアリティショックの変化と、現在の大学での学びが自分の人生にとって役立つものなのかどうかに関連づけられたカテゴリーであると考えられる。このカテゴリーに該当する発話を行った調査対象者は2名であった。

<職業>については、学業に対するリアリティショックの変化と、現在の大学での学びと将来自らが目指す職業と

の関連を表したカテゴリーであると考えられる。このカテゴリーに該当する発話を行った調査対象者は8名であった。

<在学中>については、学業に対するリアリティショックの変化と、在学中の学業生活の展望との関連を表したカテゴリーであると考えられる。このカテゴリーに該当する発話を行った調査対象者は5名であった。

以上の「将来展望」に関する下位カテゴリーについて、一人の対象者から複数のカテゴリーが同時に語られることもあった。また、(A)の調査対象者全体からは、全てのカテゴリーが得られた。また、(B-1)の対象者からは、<人生>と<在学中>が、(B-2)の対象者からは、<職業>と<在学中>のカテゴリーが得られた。

考察

本研究は、大学一年生の時に学業に対するリアリティショックを体験した学生に対して追跡調査を行い、大学二年生の時点でそのリアリティショックが変化しているのかどうか、また、変化しているのであればそれと関連を持つ要因は何なのかについて検討を行うことを目的としていた。大学二年生10名に対する面接調査の結果から、学業に対するリアリティショックが変化している学生とそうではない学生がいること、また、変化と関連を持つ要因として「講義の専門化の認識と講義数の増加」と「問題焦点型の対処の発生」という2つのカテゴリーが、変化の結果とし

て「将来展望」というカテゴリと＜人生＞＜職業＞＜在学中＞という3つの下位カテゴリが得られた。以下、得られた結果に従い、学業に対するリアリティショックの変化、学業に対するリアリティショックの変化と関連する要因という2つの観点から考察を行う。

学業に対するリアリティショックの変化

大学一年生の時に感じた学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消しているかどうかという観点から分析が行われた結果、10名の調査対象者のうち8名から軽減、もしくは解消していると考えられる発話を得られた。軽減、解消していた原因については次の「学業に対するリアリティショックの変化と関連する要因」で述べる。ここでは軽減、もしくは解消していないと考えられる発話を行っていた2名に焦点を当てて考察を行う。

学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消していないと考えられる発話を得られた調査対象者のうち、学業に対するリアリティショックが軽減・解消せずに問題が先送りされたもの（B-1）については、以下のように考えられる。Table 3にあるように、B-1の調査対象者は、学年が上がったあとの学業生活に対しても依然として違和感を覚えており、その違和感は更に学年が上がった後に解消されると考えていることがわかる。この調査対象者は、学業に対するリアリティショックを感じた大学一年生の時と同様の観点で、大学二年生の学業経験を捉えていることが推察される。つまり、「現在大学で取り組んでいる学業は一年生時点で自分が期待していなかったものではないが、大学三年生になれば自分の期待しているものに取り組めるに違いない、だから三年生に期待しよう」という観点である。これは大学一年生の時に経験した学業に対するリアリティショックとその対処と同様の構造を持つものであり、学年が上がったあとも、大学一年次の問題は解消されず、結果として問題が先送りされているものとして捉えることができるのではないだろうか。

次に、学業に対するリアリティショックが軽減、解消せずに新しい問題が発生したもの（B-2）について述べる。この調査対象者は、「講義の専門化の認識と講義数の増加」に言及しながらも、それによって心理学をどのように捉えればよいのかわからなくなってしまったと述べている。学業に対するリアリティショックを経験した大学一年生の時に抱いていた、「学年があがれば専門的な学びに取り組むことができる」という学業に対する将来展望が実現はしているものの、その経験自体が新しい問題を生んだものとして捉えることができるだろう。この調査対象者については、こういった心理学を「だんだんよく分からなくなってきた」経験を混乱であり不適応として捉えることも出来るが、その一方で、大学一年生の時に自分が抱いていた学業に対するイメージや期待と、大学二年生である現在において経験している学業とのズレを調節しようとしている適応に向けた移行期としても捉えることができるかもしれない。

い。

B-1、B-2の調査対象者については、いずれも更に学年が上がると、先送りされたり新たに発生したりした問題がどのように変化しているのかについて検討を行う必要があると考えられるだろう。

学業に対するリアリティショックの変化と関連する要因

学業に対するリアリティショックの変化と関連する要因を明らかにすることを目的として分析が行われた結果、変化を引き起こす要因として「講義の専門化の認識と講義数の増加」と「問題焦点型の対処の発生」という2つのカテゴリが、変化の結果として捉えられる「将来展望」という1つのカテゴリが得られた。

変化を引き起こす要因

「講義の専門化の認識と講義数の増加」については、先にも述べたように、生徒化した学生に特有の学業態度を依然として有している調査対象者であれば、外的に自らが期待していたものが与えられる経験が増加するため、学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消する要因として大きく働くことが推察される。そしてそれは、彼らが大学一年生の時に抱いていた、「大学一年生である今は自分が思い描いていた心理学を学ぶことは出来ないが、この先学年があがれば学ぶことができるだろう」という学業に対するリアリティショックへの対処方略である【将来展望】が現実となったものとして理解することができる。このカテゴリに該当する発話を行った9名のうち、8名が（A）学業に対するリアリティショックが軽減、もしくは解消したに分類された調査対象者であり、多くの学生が第一にこのようなカリキュラム上の変化によって学業に対するリアリティショックを軽減、もしくは解消していることが示された。

ここで、半澤（印刷中）の議論にもあるように、調査対象者が依然生徒化したままであり、履修することのできる専門科目数の増加というカリキュラム上の変化のみでこのような学業に対するリアリティショックが変化したのであるとすれば、それは彼らの学びにとって十分ではないと思われる。何故なら、同様の問題に直面した際に、また将来を展望し、外的な要因が変化するのを待つといった対処方略しかとることができない可能性があるからである。そこで重要になるのが次に述べる「問題焦点型対処の発生」である。

「問題焦点型対処の発生」については、調査対象者10名中5名がこのカテゴリに該当すると考えられる発話を行っていた。これは、発話例（Table 3）にあるように、授業などで「ちょっと違うなあ」と感じたときにそのままにせず、自分でその点について学びを進めていこうという主体的な学びの態度の発生としても捉えることができると思われる。このカテゴリに該当する発話を行っていたのは（A）の調査対象者のうちの5名であり、彼らは、【講

義の専門化の認識と科目数の増加】というカリキュラム上の変化だけではなく、そこで経験する学びに対して何か問題を感じたときに、自ら主体的にそれを解消していこうとする態度を獲得した、もしくはしている最中であると考えられるのではないだろうか。半澤（印刷中）の議論に引き付けて考えると、生徒としての学業態度を有していた彼らが学生に移行するプロセスとして、この「問題焦点型対処の発生」は捉えられると考えられる。

変化の結果表れた要因

先の2つのカテゴリーが変化を引き起こす要因であるとするれば、「将来展望」は、変化の結果として表れた学業に対するリアリティショックと関連する要因であると考えられるだろう。このカテゴリーは、学業に対するリアリティショックの変化を現在より先の時点の出来事の展望と関連づけたものとして捉えることができ、〈人生〉、〈職業〉、〈在学中〉という3つの下位カテゴリーからなっていた。いずれも、(A)の調査対象者については、学業に対するリアリティショックが解消、もしくは低減し、自らが希望する学びに取り組めるようになったことで、大学での学びを自分の将来と結びつけて捉えることが可能になったものとして理解することができるだろう。一方、(B)の調査対象者については、〈人生〉、〈職業〉の下位カテゴリーのように、そのような結びつきが困難であったり、〈在学中〉のように問題を先延ばしにすることで結びつけようとしていたりしていることが示された。

これまでの大学生を対象とした研究では、彼らが自身の学びを人生や職業といった卒業後の将来展望とどのように結び付けているのかという観点で行われた研究は様々になされてきた（たとえば半澤・坂井，2005）。一方で、大学2年生から3年生、もしくは4年生の学業生活を展望するといった、在学中の学業に関する将来展望については十分に検討されているとは言い難い。本研究で得られた知見のうち、特に〈在学中〉という下位カテゴリーは、このような大学生活4年間の中での将来展望に焦点を当てて彼らの学業適応を検討する必要性を示唆していると言うことができるのではないだろうか。

まとめ

本研究によって、学生が一年生の時に経験した学業に対するリアリティショックに対して【将来展望】という対処方略を取ることがある程度有効であること、しかし、それは生徒化したままでは不十分であり、学年があがる中で「問題焦点型対処」を取ることができるよう生徒から学生に移行していくことが重要であるということが示された。また、学業に対するリアリティショックが変化することで、学生は自身の学びを将来の様々な段階と関連づけて捉えて考えることができるようになり、その中には従来の研究で指摘されてきた〈人生〉や〈職業〉といった卒業後の将来展望だけではなく、〈在学中〉という大学四年間の中での

将来展望も存在することが示された。今後は、ここで明らかになった様々な知見を、学生支援など、具体的な学生とのかかわりの中で実践していくが必要になると考えられる。

引用文献

- Glaser, B., & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory*. Chicago, IL: Aldine. (後藤隆・大出春江・水野節夫(訳) 1996 データ対話型理論の発見—調査からいかに理論を生み出すか 新曜社)
- 半澤礼之・坂井敬子 (2005). 「大学生における学業と職業の接続に対する意識と大学適応：自己不一致理論の観点から 進路指導研究, 23, 2, 1-9.
- 半澤礼之 (2007). 大学生における「学業に対するリアリティショック尺度」の作成 キャリア教育研究, 25, 1, 15-24.
- 半澤礼之 (2009a). 大学1年生における学業に対するリアリティショックとその対処—学業を重視して大学に入学した心理学専攻の学生を対象とした面接調査から— 青年心理学研究, 21, 31-51.
- 半澤礼之 (2009b). 学業志向的な大学進学動機を有した大学生の「生徒的-非生徒的学業態度：「学業に対するリアリティショックとその対処」モデルの背景の質的検討 大学院研究年報—文学研究科篇：中央大学, 38, 61-75.
- 半澤礼之 (印刷中). 学びを深めるために 心理科学研究会 (編) 大学生活を豊かにするための心理学 福村出版
- 本田由紀 (2005). 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで 日本の〈現代〉13 NTT出版.
- 伊田勝憲 (2011). リアリティショックへの対処と学習への動機づけの関係を考える—半澤論文へのコメント— 青年心理学研究, 23, 1, 85-89.
- 伊藤茂樹 (1999). 大学生は「生徒」なのか—大衆教育社会における高等教育の対象— 駒澤大学教育学研究論集 15, 85-109
- 株式会社ベネッセコーポレーション (2005). 平成17年度経済産業省委託調査報告書 進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—報告書 京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会 (2007). 大学生のキャリア意識調査2007 <http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/top.html> (2013年6月16日)
- 松下佳代 (2010). 〈新しい能力〉概念と教育—その背景と系譜 松下佳代(編著) 〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー ミネルヴァ書房pp.1-42.
- 文部科学省 (2008). 学士課程の構築に向けて (答申)
- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research : Grounded theory procedures and*

- techniques. Newbury Park, CA : Sage. (南裕子(監訳)
1999 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの
技法と手順 金剛出版)
- 武内清・佐野秀行・伊藤素江・谷田川ルミ (2004).
現代大学生の変化と大学満足度に関する実証的研究—
「12大学・学生調査」の再分析— 上智大学教育学論
集, 39, 27-43.
- 山口昌澄 (2003). 大学生の学業的自己疎外感に関する
研究—外的統制・非社会的志向性・学業態度・大学生生活
への満足度との関連から— 人間科学研究10, 2, 62-
73.
- 山口昌澄 (2005). 「学業的自己疎外感」の消極的学業態
度・大学不適應に及ぼす影響に関する研究 中九州短期
大学論叢, 27, 1, 32-39.